放品

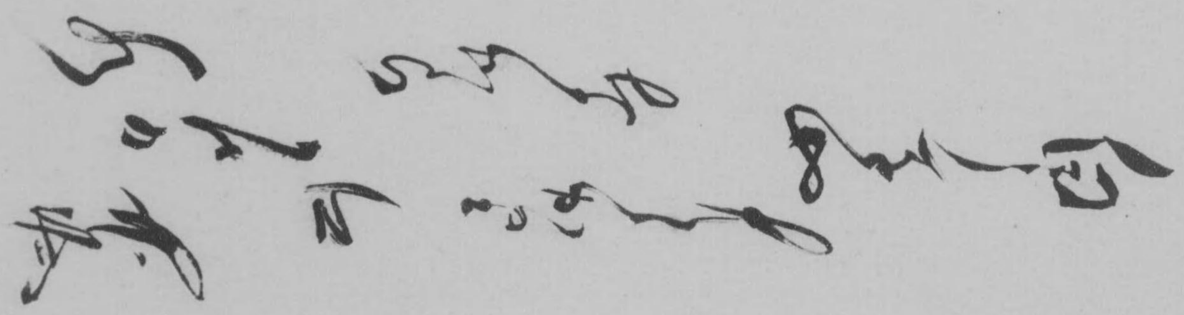
391
178

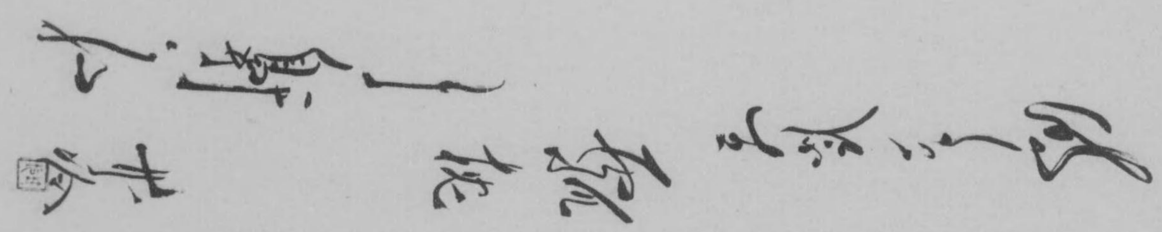
# 東洋勧

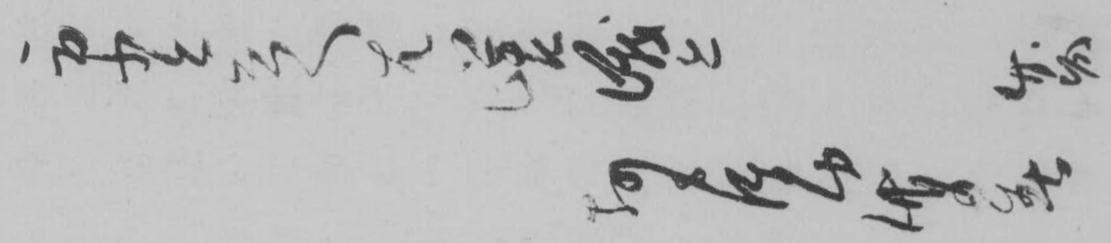
391
178

391-178

大正
9.10.15
内交







# 竹冷句鈔序

秋聲會に始まつて、白人會に終れる、我と竹冷翁との俳交は、實に二十餘年に及べり。此間翁は政治に、法務に市政に、實業に、日も猶足らざる忙裏に在りて、而かも造次に俳を想ひ、顚沛に俳を味ひける。綽々たる其閑日月は、眞に敬服すべくして、又欽慕に耐へざる所なりき。今や翁逝いて玆に一年、翁の知友門生の間に、竹冷會なるものゝ設けられ、東京、京都、沼津の三所に其句碑を建つると同時に、翁が一代の吟咏の中より、會心と思しき物のみを集めて、句鈔一篇を編む事となんぬ、共に其の

俳徳を偲ばんが爲めのみ。思ふに翁も泉下に點頭して、例の微笑を浮べんと也。

大正九年申年九月

後學　樂天居小波



# 凡例

一此の集竹冷翁の句千餘を集めたり

一紀行としては俳遊記、隨筆としては聽雨窓俳話ありて、早く世に出でたれば、其うちにある句はわざと省きたり。

一鎌倉日記及在京日記は、逝去最近の作なれば、添付して當時を偲ばんとす。竹冷年表は、思ひ立ちて急に編したるものなれば、杜撰を免れざるべし。大方の訂正を待つ。

一卷頭に挿みたる寫眞の句は、碑に用ひたるものにして、「白魚や」は神田に、「時は彌生」は沼津に、「京といへば」は嵯峨に建てたる原本なり。

一表紙は、故人の愛用せし短冊のそれを選び、題字は遺墨を集めて其

のまゝに刻したり。以て不完全ながら本集を成せり。

一編輯校正は竹涼氏の參與を乞ひて、耕石、露竹、麥人之に當れり。

一卷尾に附したる寫眞頤杖は神田、及沼津に建てたる碑の原本にして翁の愛用せしものなり參考の爲め載せ置きたり。

大正九年十月

編者



# 目次


新年

天文地理時令……一

人事……四

生類……八

植物……九

春

天文地理時令……一一

人事……一九

生類……二三
植物……二八

## 夏

天文地理時令……三七
人事……四二
生類……五一
植物……五八

## 秋

天文地理時令……六五
人事……七六
生類……八一
植物……八六

## 冬

天文地理時令……九五
人事……一〇二
生類……一〇六
植物……一〇九

歲暮……一一三
雜……一一七
送別……一一九

祝賀……一二一
弔悼……一四五
鎌倉日記……一六九
在京日記……一七八
竹冷年表……一八一

目次終

# 竹冷句鈔

新年

初日影人は馬上のものならし

新年雪（明治四十三年勅題）

門の雪黒の小袖に初日かな

社頭杉（大正三年勅題）

千木高く杉の五十鈴の初日哉

新年

新年松（明治四十年勅題）

初空や松を千里の濱庇

棧道や初東風に面うたせて

なつかしう昔めきたり初霞

前髪に年立かへる若衆哉

ころ柿の白きを年の初め哉

雪中松（明治四十二年勅題）

鶏の音や雪に明け行く千松島

愚に暮れて大器といはれ明の春



新年河（明治三十九年勅題）

御代の春野川も海にそゝぐ也

家の春盃一つ洗ひけり

新年雪（明治四十三年勅題）二句

ほの〳〵と犬四五疋や門の春

竹四五本犬ころ二三雪の春

松上鶴（明治四十五年勅題）二句

鶴巣ふ國の林や松の春

松上の鶴岩上の龜や春

てん〳〵天氣の春獅子の囃かな

午前の元日暗き町家哉

元日や我は日本に生れたり

元朝や窓に横たふ梅一枝

元朝や軒は古りても富士の山

元朝や灯かゞやく露地の家

海岸や異人親子のお正月

雪が降る骨正月や置炬燵

馬に出ずして正月の小袖かな

神風の伊勢に生れて年男

年男やたら寒がる額哉

年禮の衿もと寒き戸口哉

萬歳やそも〳〵飯を立場茶屋

萬歳や才藏や波の音松の聲

猿引のたつゝけはきて鼾哉

傀儡師内藤公のお庭かな

鳥追や編笠と其の笠の紐

鳥追や三味かゝへたるなつかしみ

ふすほりし餅をどんどの名殘哉

爆竹や蛭が小島の畑の中

陀羅尼經や動くが如き星佛

初卯詣古渡にぱつちを懐かしむ

こと〳〵とまた夜深きを恵方哉

追羽子のそれや京髪の小脇差

鞠唄や障子隔てゝ緣の先

利根ゆた〳〵凧の唸りを舟の上

日の影や小袖の匂ふ弓始

芝浦

初買に出ばやどてらを引かけて

船宿や柱暦の初こよみ

布帆莚帆港小さくも初荷

打榮えたり我家ながら注連飾

一葉（築地）

注連飾松は一葉も夫婦哉

社頭杉（大正三年勅題）

注連飾杉の木の間の鳥居哉

蓬萊や障子明くれば日の光り

眉毛長く圍爐裏に坐して雜煮哉

凡人の親子並びて雜煮かな

小豆粥嵐雪ひとり祝ふ哉

嫁子よい子や節振舞のなじみ顔

人日や前垂はづす小女房

酒の香や往うさ來るさの春角力

藪入の刀さいたるが父かとよ

藪入の胡坐をかいて見たる哉

藪入て暫し炬燵の主かな

遽々然と霞み來る我藪入か

今日は起きて聞くものにせん初鶯

耳たぶやされば惠方の初鶯





浴みして伊豆に旅人や初鶯

玄關に輿丁醉うて松飾

門松やものに飽きたる翁丸

別業や伏家に並ぶ門の松

雲門や薺囃して水に響く

新年川（明治三十九年勅題）

薺はやす淺草川の家居哉

我宿や背戸へ出づれば初若菜

## 春

### 天文、地理、時令

東風そよ〳〵暖簾のはしの旭かな

あれよ〳〵と的の扇や風光る

老媼の眼鏡や縁に光る風

藤原の時平か大臣風光る

流鏑馬や犬追物や風光る

御輦ゆた〳〵遙に風の光る哉

光る風窓に椿の葉越し哉

春風や馬に乗りたる小百姓

野仕合の白き襷や春の風

鶏のうしろ吹かれて春の風

土藏白く町めく村や春の風

春の雪博覽會の足代かな

仰向いて食らはんとぞ思ふ春の雪

春の雪物語るうちに消えにけり

蒟蒻の淡雪消えて露地に入る

春雨やともさで窓にものを讀む

大正四年四月十七日夜降雨十八日

興津井上侯別邸園遊會

春の雨もの食ふ袖にかゝりけり

初虹や海波親しむ大鳥居

初雷や机に寢たる宵の内

曉や稻葉の山の別れ霜

霞む舟巾ふる山をうしろ哉

牛若の眉のあたりや春の月

ふうはりと三笠の山や朧月

母じや人にまみゆるが如おぼろ月

月朧何とはなしに春心

三輪を出て朧月夜の徑かな

殘雪や天水桶の蓋の上

殘雪の比枝や湖上の夕日影

殘雪や如意輪堂の縁の下

殘る雪垣穂の鳥のきげん哉

殘雪や鴉の來啼く伊勢か軒

殘る雪支ゆる垣の結ひ目哉

浦山や松にたま〳〵殘る雪

暖簾や格子外れて古き雪



住吉や雪むら消えの岸の松

畑の雪葱の一葉に解けにけり

我が領す南ゝが丘や霜解る

案内者の霜解道に出たりけり

霜解や庄屋の袴の尻下り

水ぬるむ眞間の繼橋ひた〳〵と

水はりて春を田に見る日さし哉

傘さして小舟出しけり春の海

海や春小舟のへりに腰かけて

干る汐を追うて土踏む鴉哉

重ねたる衿の白きに餘寒哉

立並ぶ杉の春日の餘寒哉

氷搗の汗ふいて居る餘寒かな

春寒うあけ行く櫓太鼓かな

春寒う胸のあたりのげんこ哉

忍び給ふ鼻赤の君や春寒う

揚弓のかちんと春の寒さうに

牛喘ぐ小野の徑や冴返る

人戀し船路ゆた〳〵暖く

軒下の莫蓙や玩具や日の永き



はた〳〵と草履日永き廊下哉

昔男ありけり春の日の永き

長閑さや啣へ煙管の海士の顔

雨中柳島橋本お説會席上

食うて寢て坐して咄して雨長閑

家を留守にもの盗まれし彌生哉

稚子のもの食ひならふ彌生かな

曙の空匂ふなる彌生かな

魚賣と戸口に咄す彌生哉

彌生哉野を行く馬の尾を結うて

時は彌生ひさご枕に鼾かな

夜を汽車にうつゝなの旅春なれや

夜の春を清水坂に憩ふ哉

浦人の小唄習ふや宵の春

夢買うて酒振舞うて春暮れぬ

春行きぬ腕拱きし其うちに



## 人事

初午や太鼓つるせし椿の木

初午や紺前だれの眞田紐

階段に泥足乾く涅槃哉

門前に牛うなだれて御忌の鐘

賣るや柴御忌に詣づる道すがら

長老に鴉のなるゝ彼岸哉

鐘聞きに洛へ寢に行く彼岸哉

彼岸會や畔を女の紙草履

西行忌殘んの雪の梢かな

釋奠や跪座の老翁尊かり

釋奠や繪像かしこみ鳥歌ふ

渡り來し紅毛やゆらり馬の上

代り來て敷居に坐る女かな

寒食の風雨過ぎたる机哉

爐塞いで一句ものする柱かな

古葛籠桃の節句の世帶哉

うなゐ子の紅さす雛の節句哉

火ともせば雛の屏風に雛かな

おもさしの母の母御や小袖雛

雛段や小さき灯のかゞやきて

上人の抱一が筆や紙雛

紙雛や浦の苫家に風渡る

白酒や我醉ひ得たる小半時

鶏合砂に裾ひく公卿衆かな

塗盆や鶯餅を紙の上

俳稿や机の上の草の餅

からびたる草餅得たり有馬越

草餅や二つ並べて東山

かんざしや籠に盛りたる櫻もち

山かげや耕せる人の點々

畑打を渡し仕舞の小舟哉

畑打や尻のあたりの小脇差

筏士に燒ける野末の埃かな

山燒る火影や馬の人見ゆる

憂き戀の根なし草ともさし柳

君がさせし柳芽ばりつ君待つか



## 生類

猫の戀片割月のあはれなり

枕草紙

雉子の尾にうら〳〵見ゆる野風哉

雉子飛ぶや望遠鏡の夕日影

筑波根の雪ちる雉子のほろゝ哉

鶯や初音聞きしと皆が云ふ

鶯や茶汲女の白き足袋

山駕に暫くなしむ雲雀哉

地を穿つべう下し來る雲雀哉

百千鳥水の流れを木の間かな

ぬれ乙鳥晋子が眉を掠めたり

行ぬけの玄關をかし乙鳥

乙鳥雨の上りし柳かな

雨の乙鳥春色正に闌なり

雨霽れて乙鳥ひらめく夕日影

囀や齳の老爺の土師が家

雀交る檜垣の媼の垣根哉



關守か馴染の雀交りけり

家根裏や孕雀の法隆寺

雲に入る鳥は精舍の眞上かな

飯食うて居れば門田に春の雁

行雁や江口の君のうしろ影

歸る雁窓によりてもひとり哉

鳥の巣に雨ぽつ〳〵かゝりけり

白魚や憚りながら江戸の水

鮎の子の高瀬上らん勢ひ哉

水清く鱒を覗くや湖心亭

干鱈數枚小荷駄の尻にくゝりたり

鹽鱈や京の外れの京の人

品川や蛤鍋に明鴉

蛤や汐滿ち來れは瀉をなみ

一二三四五六七八櫻貝

君が代や田螺唄へば月も出る

蝶ひら〳〵天下の春をほしいまゝ

蝶あはれ菜の花あはれ霞あはれ





立出でゝ門に蝶まち得たる哉

菜花蝶に化す江南の精舍哉

年經しか茅が軒端に蜂の巣の

熊蜂のをかしや小さく巣に籠る

蜂の巣の蜂にものいうて火を放つ

提灯の小田原過ぎて蛙かな

## 植物

人幾人訪うても梅の靜なり

梅寒し苔數へて花に及ぶ

脊戸の梅白からざるにあらぬ也

梅白し宮と藁屋と小流れと

月の梅窓の障子に冴ゆる哉

松ひよろり梅ばらり夜は薄曇

褪せてなか〳〵紅梅見舞ふ被衣ふり

紅梅や我得べくんば琴彈かん



梨花浴びてうち振ふ衣の寒かりし

杏咲く納屋の庇の小鳥かな

花辛夷人の來ぬ日を匂ふ哉

人去つて櫓に海棠の雫かな

引越の埃あびるや桃の花

有磯海の潮に臨み桃の花

桃咲くや新聞四五種・軒の先

鐵漿つけた嫁が茶を汲む桃の花

なつかしの鼓樓見ゆるや桃林

葛飾や天頭念佛赤椿

赤椿藪をぬければ鳥居哉

投入や椿仄かに灯したる

埋むるや脊戸の流れを落椿

花馬酔木若草山の麓かな

人三五みどり立たる小松原

三日月や酔顔に柳ふきつくる

馬方の提灯くゝる柳かな

柳ゆらり〳〵青みて闇はし

家あれば樹あり樹あれば柳かな

ものゝふの垂駕出づる柳哉



初瀬浪子の水棹連を

舟ありや棹動く見ゆ柳蔭

芽張りけり濁酒賣る家の門柳

初花や地主權現の朝朗

神鏡や曙寒き花の影

大正四年四月十日深川公園にて歌

仙櫻開きあり

花植ゑて古き新しき人に逢ふ

花の雲馬に飲ふ麓かな

花暮れて床几に殘る茶碗かな

さむしろに握飯食ふ花見哉

道の邊に手拭賣るや花盛

いかばかり散るぞと花にすまふ哉

ちる花や紙すく末の細流れ

生壁にひた〳〵花の吹雪哉

水底に花片沈む夕かな

明くる夜の落花踏行く素足哉

道もせに蹄を追うて落花哉

初櫻山の端の祠峯の松

昇る日の窓いつぱいや初さくら

死んだ筈の人と酒のむ櫻かな

佛生會

吉日の卯月八日をさくら哉

大正四年四月十五日向島大倉君別莊にて

諒闇は明けたり感涙會は開かれたり

かしこくも花は櫻の今年かな

木母寺の灯を見て暮るゝ櫻かな

朝顔は盛り久しき櫻哉

留別

我魂の櫻殘して別れ哉

晋子の印譜に題す

麗人の半面見たり櫻蔭

菜の花や暮れてなか〳〵日のぬくき

菜の花や太平洋の帆が見ゆる

菜の花や水の流るゝ道下り

蒲公英や子の匍匐うて登る丘

山吹や臨めば水の動く見ゆ



石一つ二つ小庭の草萠ゆる

つくばひや木の丸殿の草萠ゆる

狗脊や小雨かぶりてうづくまる

獨活の芽やしかも豆腐の華藏院

獨活の芽を春の淺きを色に出つ

俎や獨活二三本日のあたる

五加木飯念佛すみたる草家哉

丘うね〳〵茅花かむ子の三五人

つくばひや袂探れば蕗の臺

摘むか芹脛の白きを見せんとて

草籠や田芹ひいてはほうり込む

雑炊に韮を投げこむ圍爐裏哉

鍋炭や角組む芦のなつかしみ

蘆の芽や土手の茶亭に酒を飲む



# 夏

## 天文、地理、時令

波踏んで我行吟す青嵐

谷底へ牛のよだれや青嵐

修驗者の關にかゝるや青嵐

青嵐磬の響の紛れけり

青嵐馬の鬣もの〳〵し

動くものは桐の葉影や薫る風

風薫る木の間に据ゑし床几かな

暖簾やちよと顔出せば風薫る

其の子貸せ濱の涼風浴びて來ん

風涼し灯柱によせつけて

押送る舟夏の雲先きへ〳〵

月代や峰をつくれる雲の影

夕立や金鼓山河を動かして

夕立や狐まぎるゝ麥畑

風呂の火のふすぼる軒や五月雨

山寺や燈心細く五月雨るゝ

つれ〴〵や双ケ岡の五月雨



五月雨や女の裾の覺束な

草の家の葎の宿や五月雨

足色もなく乘る馬や五月晴

横臥せし床几の人や夏の月

踏み心草鞋脱がばや夏の露

こと〳〵と短夜の舟上りけり

聽法の顔白々と明易き

庵室に蓑笠かけし五月かな

緣に汐に足さし入れつ暑を語る

桃山御陵

御手洗に口そゝぐ日の盛り哉

日ぞ盛る笠を被りやれ三度笠

山神を衆驚かす旱かな

藥草の鍋庭に焚く旱哉

矮鶏幾羽八手の下に旱哉

大海の舟に人なき旱かな

苦清水鶯やせて寒き哉

むく〳〵ともものいふさまの清水哉





笈に人在らずして關の清水哉

暫くは木の葉漂ふ泉かな

夏の海松原越に見ゆる也

水踏んで石踏んで草踏んで夏野哉

月夜よし夏野行かばや笠脱ぎて

我宿は鷺と共寢の青田哉

山に降る雨の名殘を青田哉

## 人事

夏痩や奏でんとして椅子による

髯如何に胡人の顎の夏痩せて

夏痩や昔男の毛巾着

早乙女やものしたゝむる道の端

早乙女に澁茶得にけり旅の興

氷室守詩を諳んずる翁かな

撓む程風うけ得たり初幟

初幟鎌倉山の嵐かな



天地の香ぐはしき此日佛生會

灌佛や飴を商ふ寺男

祇園會や扇見下す東山

祇園會や鉾に付添ふ見知顔

夕月や長刀鉾の靜なる

守武の百首にもれつくらべ馬

加茂の競馬扇翳して參ゞじけり

御秡川流れの末の秋の風

衣かへて石段登る草履かな

弓取の袴短き袷かな

物足らじ僧が袷のうしろつき

襟足や結城單のうしろつき

帷衣や客盆石に跪く

帷衣の花田に風の匂ふ哉

ダリヤ共進會

羅の袖やダリヤの色透けて

蚊屋借りて一夜さ穴をくゝりけり

蚊屋ごしに朝の魚市見ゆる哉

明くる夜の風ひや〳〵と蚊帳哉

更くる夜や蚊帳に尺八吹く人の影

船宿や蚊帳に罵る夜明方

青簾碁盤の脚の見ゆる哉

青簾舟へ敷物投げ入れぬ

もてなしや風呂の軒端の青簾

寄添うて三味ひく影や葭戸越

夏座敷安坐に馴れし主人哉

目黒苔香園

緑蔭に軒を沒して夏座敷

抱籠や風が忍びてすうすうすう

風なくてもの書きよげぞ簟

目黒苔香園

睡蓮を木の間のものに簟

たかむしろ禪師に端居すゝめけり

煽風器吸取紙をあふりけり

合歡ちるや主が留守のハンモック

風鈴や小錢が濡れて盆の上

風鈴や年三十のぬめり妻

風鈴や駄菓子賣る家の窓の先

風鈴や妹が秀句を小短冊

もの書けば發句書く席の扇哉



旅人の駄馬にのりたる團扇哉

澁團扇はた〳〵更くる戸口哉

箱庭や箱になじみて草に花

一人憂し日暮んとして布晒す

虫干や昔吐きたる我よき句

藪越や物語りつゝ行水す

行水やぽちやり〳〵と闇の中

門の闇盲人ひとり涼みけり

初夜の鐘と聞けば秋らし涼み臺

市人や罵り合うて井戸晒す

潮浴びや笠を脊負ひし汽車の中

川狩やふどしも持たぬ村夫子

千山を知る人にして川開

國ゆすりて雨乞ふ鐘の響き哉

村人や雨を乞ひ得て泥に醉ふ

あなたふと雨乞ふ幣のゆるぎより

雨乞ふべくあまりに小さき祠哉

蚊遣火の燃えて襖の似顔哉

蚊遣火やそれを木賃の小鍋立

笹の粽木の柏餅草の酒



松一木年々心太屋かな

洛外や草鞋賣る家の心太

白糸の瀧てふ茶店心太

物思ひ出してふき出すこがし哉

賜や君に馴るてふ一夜鮓

鮨の壓比叡に登らば過ぎやせん

松遠み夕日うすつく沖鮑

甘酒や東海道の松並木

端女のためらうて居るラムネ哉

汽車に買ふハンカチーフの氷哉

夏

禪師居士納豆仕込み給ふ哉

梅干に日の照りつくる莚かな



## 生類

禰宜が子に媚ぶる鹿の子の起居哉

鹿の子に軒端貸さうぞ雨が降る

振袖に鼻息かくる鹿の子哉

ふりかへる鹿の子我等を何と見し

鳥の名の四手の田長とやものゝし

蝙蝠や扇をとばす醉其角

蝙蝠や船に泊りて湯をつかふ

夏

蝙蝠や京の縄手の貸座敷

市川福三郎所持九代目團十郎愛藏

一茶の「時鳥虫けらどももよつく聞け」暫くの書ありて「市川も一茶」の銘あり此の箱書望まれて

杜宇江戸の町人眼覺めたり

松杉の東叡山や時鳥

筆賣やあられ松原の杜宇

子規月は醍醐の峰にあり

時鳥須磨に歌よむ舟子あり

牧方や舟にものの賣る杜宇

老鶯や左近の櫻ちりがてに

心憎きもの待つ夜にたゝく水鷄哉

軒低き水鷄の宿や眞菰草

雨の水鷄竹田の里の釣灯

草の雨晝の水鷄にもの遣らん

草の闇妹許行けば水鷄哉

叩け水鷄向ひの山に月が出る

行々子霖雨の中に朽ちもせず

鵜の息の簿にせまる夜明哉

藪蔭の嵯峨は鵜の寢る小家哉

宵暗や山を遙けく鵜の篝

はかなしや鴉の浮巢の蜑が戀

京の宿金魚水盤に放ちたり

掬ひ來て茶碗に放つ目高哉

俎や駐春亭の初松魚

つと門を過ぎて聲あり初松魚

小襖や是眞がものす手長海老

家の棟の草が花咲く夏の蝶



夏の蝶草の茂みに休らうか

蟬時雨地に線香の烟る哉

大師河原平間寺

鰐口や鳴き入る蟬のしがみつく

吳竹の根岸も蟬の榎かな

蠅ひとつ繻子の帶辺りもあへず

繩簾動けば蠅の聲すなり

なじむ蚊や脊戸の逢瀨の頰冠

蚊柱や弓張月の横はる

日亭午斷橋の邊飛蟻立つ

地を打てば飛蟻たつなり法隆寺

竹林や雨來り注ぎ螢活く

飛螢板橋土橋丸木橋

荒神や燈明皿の火取虫

紙魚の息莊子机に目さめたり

世を佗びて紙魚のすみかに寢もすめり

紙魚ちよろ〳〵歌に瘦するか詩に肥ゆか

寢し子の動くや今し蚤や食ふ

枝蛙梧桐を落ちて寒竹に

子子や何やらちよこと物思ひ





蟹ちよろ〳〵波打よする緣の下

澤蟹のきげんに見ゆる蘆間哉

## 植物

餘花數朶地生權現の繁み哉

古道にかゝるや余花に逢着す

余花一朶翠の中に匂はしや

木を洩れて落つる日影や姫卯木

卯の花や古驛の娼家二三軒

卯の花や宮居に添うて巫子が家

汁溝に侍酔うて合歡の花

合歡さくや壁畫に遠き日の光



乘物や式臺近く百日紅

方丈や前栽のもの百日紅

風呂据うる場處と定めん若葉蔭

屋根朽ちて柿の若葉の光かな

茶をひさぐ僧と語るや若楓

古池の小隅明るき茂り哉

柳葉になりて埃の都かな

茶を焚いて童子待つあり夏木立

老僧の端居して在り夏木立

白雲の行衛や雨後の夏木立

木下闇大きな聲の女かな

觀音のぬれて在すや木下闇

梧桐數株隱者の軒の木下闇

窓押せば雨の梧桐の風颯と

山雨來べく軒に梧桐の騷ぐ哉

軒並や雨に吊せし桑の枝

盆栽の實梅や詩書に埋もれて

桑の實や廢宮の庭の甃

若竹や土間の灯影の雨に射す

若竹や鞍馬の奥の花いまだ



若竹の伏見に育つ男の子哉

今年竹たまし〳〵蜘の下りたり

竹の子や山をぬいたる宵の雨

門跡へかき込む牡丹重げなる

文臺や散れる牡丹の幾片を

庭狹う打崩をれし牡丹かな

岩走る水を遙けく牡丹哉

立去らで蝶の旬ふる牡丹哉

塗橋や舍人の荷ふ白牡丹

白牡丹辭義して過ぐる小者哉

主人獨り芍藥園に坐する哉

待つ戀や芥子の花片數へつゝ

夕顏や投節唄ふ納屋のうち

夕顏の宿につきけり御曹子

題夏爐冬扇

人在らず軒の夕顏花咲けり

夕顏や盥に落つる月の影

蓬生の枝折戸低く百合の花

鷺草や石灯籠に火を入るゝ



凌霄花や雲の中から宇都の山

紅蓮白蓮十千萬堂・樂天居

我戀や浮藻の花の水の底

掃墓

水やりて母なつかしや苔の花

立よれば城門寒し苔の花

釣葱市子ともの語る哉

竹椽や水ふきかくる釣葱

夕月や妹が家路の草茂み

祐成の蓑にや編まん青薄

月よさに甜瓜盗みぬ旅心

手や染まん露の茄子の朝朗

初茄子や雨華庵許の一夜漬

賤の女や干瓢むけるちらし髪

舷や語らひながら瓜刻む

瓜もみに酒強ゐらるゝ端居哉

瓜もみや俎ならす女房ぶり



# 秋

## 天文、地理、時令

秋の日のことんと落ちし水車哉

賤か家の脊戸や盥の天の川

三日月や芒ひともと穂に出でつ

今日の月散米光る社前哉

蒟蒻も芋も殘さず今日の月

旅の月露懐に仰ぐかな

宿の月行燈消して咄しけり

唐臼や葎の宿の月明り

さやけさを寝ぬ夜の月と名つけなん

半蔀や黛匂ふ月のかげ

此頃や月になじみの頬冠

君が代の月夜我代の薄哉

萩芒月見ん宿のよそひ哉

名月の夜東神奈川篠原山なる石井健吾氏別墅にて

月は既に端山を出たり皆の衆

案内なく庭に下りたつ月見かな

野社や處士か構へし月の宴

雨の月燈を圍みし詩人かな

いざよふや一竿なから窓の竹

いざよふ間いざや一さし舞はゞやな

後の月青女房の寒げなり

縁先やちろりの酒に後の月

後の月我師に頭巾參らせん

後の月無事な宗祇の髪の露

後の月いさ古酒なんと温めん

後の月こちの女房が年ふけぬ

後の月布子かつぎて地歌かな

年たけし誰彼を一坐後の月

沙魚釣や腮のあたりの秋の風

秋の風野を越えて里遙かなり

人の今昔といふ書に題す

馬肥えて人痩せて秋風悲し

鑑

東　鑑

秋風や銀猫を兒の抱へたる

野分止んて燈火多き小村哉

街に入りて槍起したる野分哉

秋の空遂に落ちたり海の上

秋の雲水に映して走るかな

馬買うて市を出たれは秋の雨

朝霧や野にものを焚く誰なるか

柴舟や霧に明けゆく宇治の里

霧立つや僧橋渡るうしろつき

早稲は花の曉の露笠涼し

白露の江に横はる夜明哉

山科や徑幾筋草の露

渡船顚覆の爲め酒匂川の激流に押

し流さる（明治四十三年）

草の露人の命あゝ秋の水

露浴びし我〻醉人を肩にして

人のなき庵冷まし露明り

野袴や小松の露を朝の内

露ちるや草鞋はきし歌聖

月の夜や芦の入江の露時雨

粥焚けは虫のなくなり露時雨

隱れ住みて粧ふ山に樵夫哉



裏の山雜木ながらも粧ひぬ

粧ふや山馬に召したる國の守

初汐や杭に小舟のふはり〳〵

初汐やだぶり〳〵と石がけに

行く水や田を落ちのびし川のへり

秋や今朝胡蘿赤く葱白し

今朝の秋小芋一升貰ひけり

秋の立つ波打際の小家かな

此頃や鞦なじみて秋の立つ

ものうさに三味もひくめり秋の暮

秋の暮思へは人は死なぬかな

野の宮や鳥居に殘る秋の暮

我庵は隣もちけり秋のくれ

此邊の秋も行くかや嵯峨の奥

冬近くしば〳〵烟る竈かな

草籠や秋の暑きを葛の葉に

汗かいて蜆汁吸ふ殘暑かな

秋晴や頤を支へて窓に坐す

秋晴や草履うがてば手向山



大正五年十月八日深川八幡境内に

鹿鹽秋菊氏主催にて矢數擧行

秋晴れたり弓絃の響それよりして

山房の知識に接す夜長かな

思ひわびて階子を下りる夜長哉

長き夜やいつそ住もなら嵯峨の奥

秋の夜や行燈ともす枕もと

燈心の夜長き影のうつりけり

長き夜の天井に穴あいてけり

秋は夜を物のあはれをものゝ本

うちつけに物も得言はず夜を秋に

夜を秋の佗臥す旅のひとり哉

山か家や障子明けても秋の聲

頬杖の故人はいかに秋の聲

もの呉れる切戸明くれは秋の聲

淀川や夜寒歌うて頼もしき

朝寒や松葉も落ちぬ圓覺寺

大原女や脚袢りゝしう朝寒う

肌寒や女主しの素袷に

そゞろ寒猪口の小きを鼻の先





雨ほた〳〵そゞろ寒さを蓑の裾

山を下りて身にしむ松の風もなし

露寒や酒買ふ程の宵仕事

露寒や室へ船出す頬冠

八朔やなじみの浪士來もすめり

## 人事

物干や七夕つめの待女郎

七夕や小縁の端の塗机

七夕や虫歌ふなるものゝ陰

七夕や妹か襷に縁を拭く

七夕や女主に男あるし

角力ふ句の今宵俳諧男七夕

星の逢ふ夜人の逢ふ夜銀河の邊

笹の葉を橋に迎へん星二つ



星二つ竹に觸るゝと見えにけり

草市に見かくる若き御方や

足を斯う手を斯う首を斯う踊れ

村夫子の盆じや〳〵と踊りけり

踊らんか盆を旅して宵の月

お祭や神田ッ子にてさふらふと

菊の香や障子明れは後の雛

重陽や書齋に翁の酒を呼ふ

池の鷺に我親しまん素堂の日

嘶きに小野を上野を駒の數

小角力の雨佗しらに炊事哉

關角力しばしやさしや髪を結ふ

角力勝てり相手を前におもはゆげ

大德は伯父に在はして角力哉

狂ほしや贔負角力の勝ちし刹那

行きくれて山に寢たれば砧哉

何某の上人か許に夜學哉

吾脊子の瓦燈に烟る夜學哉

雨や來ん漆掻く人のひとり言

新絹や白木の臺のもの〳〵し



水ひた〳〵棧橋近き燈籠哉

一しきり柳も見ゆる花火かな

草に坐して菓子食ふ村の花火哉

遠花火木に斧入れて待つ夜哉

有馬山いなのさゝ原鹿の笛

鹿笛の峰に世をふる男かな

鹿笛の下手にもどこか哀れなり

寺小屋の脊戸やちよとせし鳥驚

島原や窓になしみの鳥驚

裏畑や小さき案山子の帽を被て

すさましき亂鴉に暮れて崩れ築
詩を題す古武士か古酒の德利哉
耻かしや古酒秘め置ける佗住居
棕梠の葉や古酒溫むる窓近く
古酒一瓶破れなからも袴かな
然もこの壺中の古酒そ年經にし
古酒は瓶に樽にもりたる新酒哉
杯の底ぬけ男今年酒



## 生類

月赤き夜を掉鹿の鳴かずもあれ
雁なくや昔顏なる窓の月
鵙鳴くや東寺の塔は洛中に
都府樓の礎如何に渡り鳥
雨ほつ〳〵夕日ちら〳〵渡り鳥
岡崎や雀にあけて四十雀
鵯の來て南天の淋しかり

鵶や藪を徹して夕日影

鵤や唐臼ひかん寺の縁

晝庵ッの柱掠めつ啄木鳥

日の影のちり〳〵と野に鶉かな

深草や鶉の宿の優男

鳴立ては鉦も默して暮るゝかな

蛤とならう雀かよう飛ばず

蜩や松にかゝりし蔦かつら

秋は蟬の日暮るゝ空を鳴くものか



秋の蟬鳴なから草に落ちにけり

秋の蝶草にすがりて吹かれけり

音に啼いて淋しみ盡せ秋の蝶

なよ〳〵と馬に食まれな秋の蝶

舟よせて聞くや堤の虫の聲

不二晴れて野を行く水や虫の聲

宵闇や小舟のへりに虫の聲

虫の音や竹林院の竹の中

虫の音や烏帽子かけたる小柴垣

虫の音のちんちろりんや鉦の音の

虫各々人各々夜半の感

のり・かけや東海道の朝の虫

蜻蛉釣富士の裾野の夕日哉

物ひさく長屋の窓や夕とんぼ

飯遅き旅籠の縁や赤蜻蛉

枕頭やもの申さんと轡虫

蟷螂のやさしけに草の葉裏哉

落鮎の淵に沈みて日暮れたり

澁鮎や秋のたけたる嵯峨の里

甲斐か根や鰯焼くなる一軒家



沙魚十尾蜀を得たらん思ひ哉

# 植物

木犀や嗅きに寺子の午下り

柳散つて小舟の底の埋りけり

物思ふ夕柳は散りもせず

藪多き小村はさみて紅葉哉

行く水の大堰にそゝく紅葉哉

巫子町や軒の木實に手の屆く

木の實〳〵我俳諧は成就せり

木曾や木の實姉さん被り頰被り



年飢ゑて團栗臼に上る哉

澁柿や枝もたはゝに垣の外

僧を客に栗飯たくや藪の家

栗を飯に番茶を隣りから貰ふ

栗飯や壁にかけたる古袴

燒栗や賤しからさる片襷

禪寺の緣に干したり椿の實

京といへは嵯峨とおもほゆ竹の春

竹の春野寺の秋に興しけり

黄菊這うて白菊這うて脊戸の秋

束ねたる垣の小萩や夕月夜

白萩や嫁子にすへき人の來る

白萩や平家を謠ふ穂家の縁

白萩や松を離の高臺寺

書にかゝは丈の紫苑や露の萩

萩　寺

結ひ上げて頭の上や萩の花

鮒はねて萩から覗く池寂ひぬ

百花園



草葺や萩も芒もよりかゝる

萩の花詩僧飯焚いて閑はし

山の井や汲む人なくて萩の花

此頃や萩ちらぬ日はもの淋し

背戸川や魚簗干してあれば萩のちる

萩ちるや箭見の袂の動く時

女郎花草の猛きは物憂かり

牛吼えて小草の嵐女郎花

夕月や廣野に立てる女郎花

芒原鐘か鳴るそよ暮の鐘

我宿は芒かくれや小流れに
行燈や芒束ねし垣間より
何買ひに行く小法師そ薄原
芒吹くや流れ隔てゝ犬の吠ゆ
うね〳〵と尾花か末の月夜哉
朝顔の微風なか〳〵にあはれ
朝顔や露のひぬ間と歌によむ
商人になりて朝顔の盛り哉
雨を受けて朝顔更にあはれなり
草いろ〳〵我戀ふ野菊しほらしや
飲みなれて番茶焙ずる野菊かな
茶をのみに知人訪ひよる野菊哉

繪はがき展覽會

秋草の嵯峨野過行く思ひ哉

題百家俳句全集

盛つたりなな〳〵木の實草の花
小童の高野下りや草の花

志州鳥羽にて

此邊は盆かみそ萩賣りに來る
柴の戸や人音なへは葱草

草紅葉す便なき尼の住める邊
乘物に草鞋の侍者や草紅葉
鍛冶か火の花ちる庭や草紅葉
かしこげに犬ふるまふや草紅葉
御佛事や草の紅葉を敷きものに
我歌聖草の紅葉を扉かな
咲くや蓼納屋の戸口に狹まれて
犬の子や築地か下の蓼の花
馬蓼や土橋崩れて二三年
塔影の敗荷を壓す夕日哉



蓮の實賣の老婆池畔にあはれ
荻の聲歌によむへくあはれなり
蘆の穗や舟に人なき夕まぐれ
山裾を牛のゆく見ゆ蕎麥の花
蕎麥畑や石處々穗蓼少しく
稻の花村人獺に立騷く
粟畑の夕日さびたる穗先かな
今年米牛に曳かせて城下哉
深川や新米倉に月がさす
芋洗ふ流の末や桂川

持て來て緣へころがす西瓜哉

洪水の中賣て行く西瓜哉



# 冬

## 天文、地理、時令

木枯やすつくと立ちし富士の山

凩のあとやほつかり日のあたる

莚戸に犬のよりそふ北風哉

冬の日やしゐしの絹に暮れかゝる

ぬく〳〵と枕に冬の日さし哉

冬の月木立の中に家のあり

冬は月の片割にして照るものか

佗住みて獨なつかしの時雨哉

藪の家暮るゝおそしと時雨けり

打よりて時雨顔なる胡坐かな

村時雨德利の口へそゝぎけり

時雨るゝや隱岐の小島の松黑み

しぐるゝや疣の目につく頰被

時雨るゝや圍爐裏に焙る十團子

川音の時雨や旅の窓の下

時雨るゝかゝ〳〵松の颯々と

我庵の夜は松風を時雨哉



初霜や鞘に納めし粟田口

笠の霜羽黑の夜半に置きつらん

霜の船路菰蒲に夜明けて朝日哉

曉の霜利根をはさみし山野哉

烏の踏む通天橋や朝の霜

清正がわらんぢの紐や朝の霜

いたはしの寒鴉と寐ねん寺の霜

曉の霜に動かぬ大河かな

草の根や門の土橋の霜柱

鐘の聲犬の聲それも霜の聲

更くる夜を神の息かも霜の聲

黍殼に黍焚く土間の霜夜哉

武士の衣かたしく霜夜かな

初雪の地に落ちつかぬ松葉哉

初雪や烏帽子かぶりし男ぶり

待得たる初雪かゝれ帛

酒沽うてあるとお云ひやれ雪が降る

來てたまれ霰待ち居る小前垂

鐵鉢の錢に音あり玉霰

大かたは霰はね出る盥かな



霰霙蝦夷が魚藏の板庇

とばしりの足袋に凍るや冬の雨

ぬく〳〵と若草山の眠りけり

春日野や重なり合うて山眠る

橋越えて渡しにかゝる枯野哉

どびろくや餅や枯野の一軒家

楢の影榛の影落す冬田哉

獵沓の跡殘し行く冬田哉

初冬や扉に近きうねび山

初冬や蔦の細道馬の上

今朝冬にして樹間に祠哉

冬になりて木立いかめし門構

待つ程に蒟蒻賣の冬されて

念頃な僧と道行く小春哉

夕空に梢の並ぶ小春哉

馬の背に鶏鳴くや小春凪

小春日や伏見はづれの一つ家

鳥が啼く窓の障子の小春ぞや



日一日寺門に倚りて小春かな

佩く太刀の鞘に星照る寒さ哉

別院や案内する僧寒げなる

大江や蓬窓の灯の氷る見ゆ

寒燈の眼鏡を徹す睫毛哉

着ふくれて寒に入りけり小商人

## 人事

歸るさに宵の雨知る十夜哉

夜をこめて會式研す向つ峰

あなたふと酒この樣に夷講

途中から頭巾被りぬ酉の市

冬籠觀音經を襖かな

明くるゝ暮るゝ雀さゝ啼冬籠

冬籠さては跛でおはせしか

羅漢寺や膝を交へて冬籠



三日月や獵得し兎肩にして

辨當にかぶる焚火のほこり哉

火の番に問へば寐てゐる返事哉

鉢叩醉うて居りやると誰か云ふた

鉢叩晝は飯食うてゐたりけり

網代守西上人にとはれけり

探梅の翁頭巾にして坐に在り

丸頭巾杖を貰うて戻りけり

山賤のあごに結ひたる頭巾哉

石の上、古着市場の布團哉

引越の誇りにか貨車の絹蒲團
夢のあと殘る蒲團のくぼみ哉
誰も居ぬ船の布團や夕日影
から尻に嫁子のせたる布團哉
訪へば衾かぶりていびき哉
埋火や佗盡したる腰屏風
短檠や机にならぶ桐火桶

病中

思ひよらず髭貯へて桐火桶
榾焚くや靴も草鞋も踏込みて





炭賣や一月ものを買うてゆく
むつかしや賣炭翁の尻からげ
ぱち〳〵ぱち〳〵櫻炭
夕暮や犬の案内に雪車を曳く
寒聲や唄ひ終れば東山
仙骨の書に埋れて納豆汁
湯豆腐や障子の穴に目が見ゆる
番町や燒芋買の袖几帳

## 生類

大悟せし木兎の姿や晝の月
代々や木兎になじめる寺男
木兎遠し廣きは寺の臺所
來つゝ馴れて汐くむ擔桶に千鳥哉
千鳥騷ぐ阿濃の松原夜を深み
磯千鳥松かさ焚いて話しけり
鴨ないて立たんともせず打群れて
鴨なくや古き男と酒を飲む



曉のうからやからや濠の鴨
水鳥の砂に寢に來る日は午なり
水鳥や筏を追うて桂川
水鳥や砦の篝もの〳〵し
水鳥の水をはなれて梢かな
水鳥の靜けく流れゆきにけり
浮寢鳥析れ臥す芦の衾哉
冬を蠅我なつかしむ馬上かな

冬

沖荒れに虎河豚賣れてしまひけり

已に得し如けん勢ひ鯨舟

鮟鱇の口に落つるや富士颪



## 植物

歸り花閑居の窓の南受け

かへり花失せたる蝶の魂なるか

茶畑や茶の花嗅ぎに夕月夜

茶の花や柴門入りて右左

茶の花や僧なる智識かくれ住む

茶の花や香具山の裾に家居して

茶の花や引割飯にとろゝ汁

冬

梅白し冬を軒端の帘

花八手せまき厨の戸口かな

灰汁桶の灰汁に影さす八手哉

山科やこの頃落葉掃き馴れし

酒賣る家餅賣る家木の葉降る家

木の葉降りて樵翁が眉にかゝりけり

冬木立焚火のうつる障子哉

晝顔は如何にあはれよ冬牡丹

水仙や机の上に日のあたる

水仙や葛飾に住みて翁と呼ぶ



枯草にこんなぬくい日あたりけり

尾花枯れて我草庵の名殘なや

尾花枯れて野川二筋三筋哉

枯れながら芦は雨きく便り哉

枯芦に狐紛れていびき哉

枯芦に火を放ちたり渡守

芦枯れて日の當りけり鍋の尻

枯芦の燃ゆべく空の夕燒けぬ

芦枯れて入江淋しや亭の脚

大根洗ふうちに野末の月夜哉

き

月細う大根かけたる木の間哉

川端や車につみし土大根

酒の千鳥茶の鷸鷸蕪汁

蕪汁蓬屏風の妹背かな

青きもの葱と申さん白きもの

葱折れて雨薄氷す畑かな

親むや泊り〳〵の根深汁

風ふけば軒を動かす干菜哉



## 歳暮

突袖の醫師が端折る師走かな

旅人の悪所見に行く師走哉

年の暮市中に馬を逸したり

年暮れて市に我を知る人在らず

我宿や机殘して年の行く

牛の脊や京に別れて年の行く

行く年の賤しからざる荷馬哉

暮れて行く年のいそがし平袴

旅の情大年を市に連立て
升に落ちて忘られし除夜の鼠哉
馬方や戀を罵る年忘
年の市渡し越ゆれば閑古鳥
年の市袴つけたる御供哉
夜神樂の庭火かしこし人の顔
暮るゝ日の明くる夜の空神樂哉
山神樂焚火拜みて戻りけり
掃き了んぬ咄しもちつゝ書齋の煤
煤掃や屋根に書をよむ男あり



野社や狐追ひ出す煤拂
餅搗や御意得にまかる角力取
梁に鼠走るよ餅の音
掛乞になりけり掛を乞はれにも
掛乞や提灯抱いて庭の隅
節季候や隣へ去んで閑古鳥
節季候や柳の枝に梅の花
納會や觀世が軒の釣ともし
厄拂袂に錢の音すなり

# 雜

花下茶會

花にうたふ濃茶うす茶の齡かな

日下部博士の笠に題す

此人は酒落が上手で風涼し

月見に招かれたる返事に

こちらにも一つ出て居ぬ窓の月

知十氏見えず（殘花酒竹兩子）

明治三十八年大晦日向島にて

寒月や一人足らぬ影法師

わたましの小波子へ

味噌こしも鉢もお出來か冬隣る

## 送別

活東子信州行（明治三十三年四月二十六日）

石藤の君にまつはる思ひ哉

あのあたゝかき臺灣へか（大正五年二月小波氏へ）

春の雁何處へ行きやるぞそち向いて

送猿男子浪花行

汗拭くや君を送りに追ひかけて

三十四年夏千葉へ赴任の愚佛氏を送る

つれ立つて兩國わたる袷かな

## 祝賀

名食素朴翁還暦賀

更に百年のはじめよ門の松

浦雪枝刀自還暦賀

なつかしう芽ばる柳の老木哉

還暦の賀に（大正二年四月）

童顔や春の日影を浴びながら

還暦の人の爲に

人なつく生れ替りし鹿子にや

小林素寸氏還暦の賀（大正五年五月末日）

袷ぬきて更に單衣の元氣哉

小川閑蟬子母の還暦の賀

白きくのうつらぬは其心かや

征矢野半彌氏より求められて還暦賀（明治四十二年十月）

竹の春生れ出でたる翁かな

澁澤青淵翁還暦賀園遊會

鶴千羽庭にことほぐ小春哉

某氏還暦

雪置て見上ぐる不二となりにけり

重野成齋翁古稀賀

長閑なり花の咲くべき松の影

温古翁古稀賀

桃林に十歳の翁迎へばや

富田翁古稀賀

老木や跪くべう梅白し

川端玉章翁古稀賀（明治四十四年

三月五日）

梅白く老いたりな翁の健にして

古稀翁の賀（國手）（明治四十五年二月）

松の花國手の翁の眉毛哉

或人の古稀の賀に（明治四十二年夏）

衣更て古稀の翁に候はす

岡村又畔博士母古稀賀（大正四年六月四日）

はつ袷襷かくべき姿かな

尾鷲町土井淇水翁古稀賀（大正四年四月廿九日）

罷出でゝ着せまゐらせん更衣

竹内唫秋翁古稀賀

竹の春古來稀なる翁そも

尾崎行雄氏父行正翁古稀賀（明治三十五年十月）

弓取の腰もまがらで菊の花

於飛鳥山暖依村莊青淵先生

古稀賀宴

秋晴や山野の錦翁を待つ

山本九曇氏嚴父喜字賀（大正三年一月）

曾て古稀を祝きける屠蘇の杯を

尾崎行雄君の父行正翁七十七の賀（明治四十二年春）

我翁の七十七や日の永き

佐治翁八十賀

花くれなゐに柳みどりに翁かな



近衞老公八十八賀

鶯有慶音といふ題

鶯や朝日の赤き舌の上

佐久間深雪子より求めに

濱野箕山翁八十八の賀（明治四十五年五月六日）

百歳にまたまゐらせん更衣

柏木齋藤兩家結婚

鶴に龜松に日の出の睦月かな

奉祝東宮御慶事

並びたまふ御顔や花明り

四月九日澁澤男明石氏兩家の婚儀

披露祝宴の日風烈しく櫻花散り敷く景物を因みて祝意をものせよと

阪谷男のもとめらるゝまゝに

花吹雪友白髮とも見べき哉

中島紫竹氏新婚（明治三十六年十一月十五日）

竹の春こゝに千歳の光かな

園田孝吉氏二女峯子と林友幸氏嫡孫博太郎氏と結婚の賀

金屏や銀瓶に盛りし菊の花

大倉喜八郎氏息喜七郎氏溝口伯令嬢と結婚披露（明治四十年十一月五日）

黄菊哉白菊哉烏帽子綿帽子

群司平六氏結婚賀（明治三十五年十一月廿四日）

緑毛龜の裳に日の照る小春哉

[illegible]某氏の祝事ありて「もゝよ」といへる
文字を得たしとあるに

春待つや百代をかけて松と竹

銀婚式拜詠

鶯の千代を定むる初音かな

三田村黄雲氏銀婚祝（大正六年十一月）

色付きし木實黄金や白金や

山田三良君兩親金婚式

うたへ〳〵晝は鶯夜は蛙

岡崎博士老夫婦金婚式

岡の邊の松竹秋の暑からず

贊川他石孫眞彦氏出生祝

三方や春の光を小殿原

賀皇孫

百年をかけて卷きたる粽かな

小波氏長女三四子出生（明治三十六年八月五日）

眼ざしの涼しきもみのふとん哉

高木益太郎氏初めて男子を得（明治三十五年五月）

音に聞く風の響きや初幟

天野弘一氏男子を擧ぐ（明治三十七年五月）

菖蒲太刀和子が魂見ゆる也

琴月氏男子を擧げければ（明治四十年五月）

食はんか飲まんか食らへ飲め端午

廣岡大人の男子擧げければ（明治三十六年五月三十日生）

ものゝふの花は櫻の木實かな

山田氏女子を得（大正元年九月松子氏よりたのみ來）

指折つて酸醬草ならす日を待たん

祝凱旋

めざましや太刀の光に國の春

凱旋萬歳

提灯と旗の間の月夜かな

祝遼陽占領（明治三十七年九月四日）

日いら〳〵蜻蛉の領す野山哉

御大典（大正四年十一月）

此の年の此の秋のけふの晴れ〳〵し

同

尉に姥にいたいけな兒にも新酒かな

同

國をあげてうち開きたる小春かな

大正五年十一月立太子式

頓て國しろし召すべう神迎

口切やけふのよき日を京の水

祝紀元節

谷川や萬里の末の水ぬるむ

天長節（大正二年十月三十日）

草の實の酒になりけり君か秋

祝小林榮輔氏入營（明治四十年十二月一日）

祝賀

入營の壯夫眷高く見ゆる也

祝立机披露（西村丹治郎氏紹介）

俳諧の年立つ庵ンの机かな

立机披露の人へ祝

文臺や懷紙のはしに春の風

祝中加貯蓄銀行十周年

かゞやける黄金白金牡丹かな

祝河合武雄一子明石初めて登場

（大正四年八月）

立つか秋和子か舞臺を賑はしに

貞奴女史の成功を祝して（大正六年十月初）

月を今宵花を昔に偲ふ哉

高橋義信氏病氣全快及從來の失敗を回復するの宴會にて

香に立つや雪を根にして梅の花

思ひきつたる療治にて野老翁の一脚は助かりたり

祝賀

酒買うていざ夕立の赤脚見に

むかし其角翁は茅場町に今知十翁
は尾張町に居をトせり祝

わたましは新酒に酔はん爲めなるか
或人の無罪となりしを祝す

素裸になりて見せたる涼しさよ

江間俊一氏青天白日の身となりし
祝の宴會にて

明け行くや雪晴湖水かゞやきて



祝中央新聞五千號

滿載の汽車も汽船も春日かな

祝九州日の出新聞

ほの〳〵とこゝから明けん國の春

祝静岡民友新聞五千號（明治四十一年三月二十日）

不二にそうて雲に入るへき鳥の影

祝神田公報發行（明治四十一年四月十五日）

二六社中の中村呑牛氏へ

春風やわが知る人の軒を吹く

讀賣新聞社の新築を祝して（明治四十二年二月六日）

樓閣や仰ぐまばゆく風光る

祝富士新聞發行

若竹のすらすら雲に觸れんとす

祝三重日々新聞三千號（社長濱田國松氏大正二年五月三日）

汗の香や船に車に墨の香や

祝毎日新聞東京毎日新聞と改題

（明治三十九年七月一日）

俠骨の膚見よとや青すだれ

薫る風鳥毛の槍を立てん哉

祝中央新聞八千號（明治四十年六月二日）

夏木立雲を吐くべきけしきあり

千葉總房新聞十周年三千號祝（明治四十年八月十日）

民草や豊芦原の風かほる

米澤新聞千號祝（小林源藏氏より

依頼大正四年十月）

野に粧ひ山に粧ひて國の秋

祝法律新聞發刊

名月や双瞽のわたる丸木橋

祝北斗新聞發行

夜半の秋眼を射る星の光哉

祝國益新聞獨立（雨六子より求め

らる明治三十六年九月一日）

暖簾を高くかゝげて角力取

祝富士新聞五千號





曉天や菊の露吸ふ壯夫かも

祝雜誌東京一周年（明治四十二年

十月二十三日）

百菊や猩々菊や秋の花

# 弔悼

悼梅逸子（明治二十九年十二月）

星いら〳〵梅か香っんと鼻をつく

和田篤太郎氏追福（明治三十二年）

はつ花に首すくめたる恨かな

弔廣瀨中佐（明治三十七年三月二十七日戰死舊二月十一日相當）

吹きよせよ神のやどりしうつせ貝

追福大岡育子（明治三十八年四月二十日死去）

行く雁を仰ぎ能はぬ瞼かな

明治三十九年一月二十一日大寒の日上野三宜亭にて活東子追善會

けふは寒い日にぞありける梅の花

悼櫻痴居士（明治三十九年）

來しは君を迎ふる爲か午の

悼川村雨谷翁（明治三十九年十二月二十九日死去）

翁逝いて我等に御慶なかりけり

靈前に猪口まねらせん冴返る

下條正男君末男二十五歳にて死去

俳句及音曲を好まれし由（明治四十四年三月）

香煙縷々春のゆくへを偲ぶ哉

牧野望東子追悼（大正二年一月十六日於赤十字病院死去）

陽炎やもの思ひ出て物を云ふ

三月五日望東子四十九日

鶴去て梅か香殘る書院かな

悼服部耕雨氏（耕石氏父）

春淋し忘れては酒に君を待つ

大正六年四月二十七日夜怡余子死

去（天津に於て）

青葉若葉雁は何處まで歸りしぞ

悼後藤新平男夫人（大正七年四月八日死去）

鳥雲に入り了んぬるか聲もなし

明治三十五年五月十一日上野三宣亭に於て蘇山人七七日追悼

蠅に物與へてなりと慰まん

悼不曲子（明治三十六年八月一日午後四時死去）

顏にあてゝ暫く語なき扇かな

明治四十五年七月三十日零時四十三分聖上陛下崩御

此日烈日人畜草木の動くを見ず

うち伏して草の葉末も土用哉

此夜闇にしていたく雨降る

かむあがりまして闇夜を白雨かな

下萬民に至るまでうちしほれぬ

るさまうつし御身の天にのぼり

給ひて闇の世となりしに白雨を

下し給へるが如く感じ侍る

愛娘温女史を失はれたる紀州熊野

なる土井淇水翁を慰めんにも道遙

かに且業務の爲め寸時のいとまを

もゆるさず（大正二年四月十二日

死去）

携へてまからんか新茶それすらも

水野醉香氏追悼（大正三年六月二

十三日）

君あらず生ける松魚と山葵哉

けしの花思へば〳〵つよきかな

悼山本九曇君嚴父（大正四年八月

十日夜）

けふになりて其の帷子の姿かな

南岳氏あやまちて水に死す（大正

六年七月十三日）

蓮の葉の佛涼しき行方かな

大正七年七月十三日ときわ木倶樂部にて南岳一週年追悼俳句會、木曜木太刀南柯の諸氏發企「夏の水」追想

家に近く淺かれ清かれ夏の水

明治廿五年十月五日かねて療養の出先なる伊豆内浦の親戚がりにて母人うしなはれしよし急報ありければ。

菊白く秋の日寒き垣根かな

追福林江左子（明治三十年九月二十六日）

髭程に穡握りて念佛かな

悼子規子（明治三十五年九月十九日）

入る月の殘せし露の光かな

悼森無黄子妻（明治三十六年八月八日葬式）

朝顔のしぼめる垣をかたみ哉

悼淺井瓢ろく子（明治四十二年八月二十四日死去）

横はる瓢に秋を鳴く蚊哉

悼伊藤博文公（明治四十二年十月二十六日薨去）

秋の暮物打語る人もなし

悼鳩山博士（明治四十四年四月十日）

夜を深み衾かつぎて露時雨

加藤犀水博士母堂菊枝子追悼

（大正二年十一月二十二日於竹芝館白人會）

秋は既にものゝあはれを霜が降る

大野洒竹子追悼大正二年十一月二十三日伊香保樓にて五丈原瓊音兩氏催

墨すれば筆とれば秋のひゞき哉

南岳子追悼神樂坂倶樂部にて大正六年十月十四日（但八月廿九日）木太刀社南柯吟社木曜會催

實のぬけし蓮白露の臺かな

大正六年十月三十日神樂坂倶樂部

に於て紅葉忌

頬杖の君おもふあした露を寒み

悼放牛舍桃林香[波子]

殘る蚊の聲にすがりて涙かな

故浦竹圃翁を遙に祭る

ちくほ折句

散る露や供物に影のほの見ゆる



悼芦水子（三澤常次郎氏）

芦枯れて地に物音の絶えにけり

明治三十六年十月三十日夜十一時

十五分横寺町宅に於て紅葉子逝け

り

靈前の鹿うづくまる時雨かな

追悼紅葉子、三十六年十一月二十四

日白人會にて

おもひ起す弦のひゞきや小六月

追福　紅葉子の爲めに小波亭にて

（明治三十七年十月廿九日）

既に額いた痕あり塚の霜

有栖川大宮殿下の神去り給ひたる

事議會に報告を受けて

全身に寒の入たる知る日哉

其角忌二百年忌

其角忌や昔賣れたる鐘が鳴る

田口鼎軒翁七回忌（明治四十四年

十二月十六日）



あゝ七年櫻の花は咲きにけり

朝鮮木浦福田氏（松濤園梅一氏）

三回忌追悼

うつむけば花咲く春を襟寒し

追悼花塘（千阪彦次郎氏室さは子）一

週年忌（明治四十二年五月二十一日）

俤や水打そゝぐ苦の花

大正五年五月二十八日於青松寺故

山座圓次郎氏の三回忌追悼會あり

在英京故人の句「彗星の尾を貫くや
杜宇」今の支那の形勢に故人の抱負
（支那公使たりし時）をおもひやりて

杜宇はつと開きし眼かな

大正五年七月二十三日築地本願寺
にて俳句弔靈會（報知新聞社催）

滓や蓮や憂さ忘れ草菩の花

薄氷女史一週年（明治三十四年十
月十九日）

櫛見ても簪見ても秋の暮

越後の人大川笠原氏二十三回忌
（明治三十九年九月）

稲の香や是なん萬里國の秋

全生庵方外居士（浦春暉）十三回忌

秋寂ひぬ萩も芒もうち伏して

彌生主人三回忌（坊主姿の人）（明治
四十四年十月十五日）

行くや秋法師姿の人を思ふ

畏友なる志士天野爲三郎翁逝きて

弔悼

十三年大正四年十二月十一日夜書

し贈る

月あかき夜を棹鹿の鳴かすもあれ

大正六年十月十四日名古屋市中區

松山町照運禪寺士朗追悼俳莚

秋高く世界の不二は晴れにけり

母人の三十五日に(明治二十五年冬)

縁先に坐布團計り小春かな

久貝義次氏亡父一週年(明治三十

六年二月十九日)

薫物にきく俤や夕しぐれ

大正四年十月三十日紅葉子十三回

忌

と聞きしが弓弦の音を夕時雨

思ひ起すよい茶よい菓子時雨るゝ夜

紅葉忌沈思に明す夜なるべし

長き夜や在るべき人の座に在らず

三女妙斌大姉斌子三週忌日十一月

二十九日熊本旅中にて

時雨來て阿蘇の煙にむせぶ哉

大正八年一月寒月といふ題にて蜂須賀茂昭侯一週年(二月十日)追悼句

求めらるゝまゝに

燭夜更けて氷れる月のひゞきあり

播州の人樵風翁五十年忌

霜のかね曾根の古松にひゞく哉

懷藤樹先生(明治四十三年十一月池田龍一君へ)

人各〻冬のぬくみを緣の端

栗原皆夢庵の葬儀(青山齋場)に列りて(明治四十四年三月十六日)

臨濟の喝卻して冴え返る

畏くも聖上陛下の御惱御平愈を祈り奉る人民の光景

明治四十五年七月廿八日皇城附近にて

夜の途上　青人草の夏の露

## 哀音遺響

大正元年九月十三日青山御大葬場へ夜八時前先着、幄舍に在りて御待うけ申上ぐ、八時御出發の大砲響けるより、今か〳〵と存ぜし折柄、十時三十七分といふに、式場へ御着ありて、御輻車の徐ろに運べる毎に、沈痛の哀音響ける悲愁斷腸の思ひ得も



云はれじ。

傳ふなる歴史　このかた秋の聲

# 鎌倉日記

○大正七年十一月二十九日より腎臓炎にてうち臥し、佐々木政吉博士佐々廉平博士、岩佐男の諸先生と、内倉主治醫の世話に由り、漸く轉地し得る事になりたるを以て、十二月二十九日榮子、四三子を携へ、鎌倉小町なる平野家方へ參る。不二男は送りて夕方歸京す。

鎌倉や夕日うけつゝ千鳥待つ

此家の日當りよきに心地よく、曾て蕪村が「うかれ越せかまくら山を夕千鳥」の作ありしをおもひ出て得たるもの。

○三十日　晴　親戚に橋本太吉、浦五十吉、園池公致諸氏在り、訪はれつ訪ひつ、

冬枯や物かたりゆく漁者樵者

はしめ「物語りつゝ古蹟過く」とものしたるを「つゝ」は前の句にあれはとて斯くせしに、はからず蕪村の蓑と笠に似たるも病中面倒に存じ其まゝと爲したり。

○三十一日　晴　友人には郷男、都筑男、原田男ありて、

霜晴の閑を破らず滑川

こは霜枯の下草に、松杉の驕れるさま、東南うけの日さしよきに、高からず低からず、遠からず近からず、よき配置の山を控へ、申分なき眺望、翠微は滑川を浸す迄に庭中のものたり。是郷男別莊の即詠。此日東京より不二男見ゆ。

○大正八年一月元日　晴、曇、風、雨　旅にしあれば、くり上げて此日讀書始めをと机に向ふ、いつもわづかの他行にも、萬葉とつれ〴〵草と枕の草紙とのうち何れかを持參するを例とす。こたびは日數少しく長く一ヶ所に落付き得べきを以て、三種と外にも數々持參し、氣にむき次、第あれよこれよと手を出さん用意したり。

△萬葉は平和に長閑やかなる歌集にして、古代の簡素なるさまうれしく。殊に上は帝王より、下は遊女物乞ひのよみし歌も入りて、其の俳的なる此上なし。自然を味ははんとせば此の歌集に如くはなし。

△徒然草は大膽なる趣味の書にして、又凡人の批評を顧ぬ廣き趣味の書であり、眞に超越したる俳的の書なり。

△枕の草紙は其の一葉をうちひらきても、既に溢るゝ程の俳趣味の書なり。

此の日は朝晴れたるに、間もなく曇りて、更に風はげしく又雨となれり。

元日や火桶抱へて風を聞く

犬吼えて晝すさまじや木枯の

梢を鳴らし、戸をうつひゞき、中々に凩なんどのやうにも聞ゆ。此句枕草紙をよみもて行き、二十年前の書入などくり返したる折の得もの也。

元日や峯につゞきて松の聲　榮子

鳩や惠方八幡の家根いつぱいに　同

初日未だ稲村か崎や松遠み　四三子

鳩うごめく八幡の華表初日影　同

○二日　曇　靜にして頓て晴るべき模樣なりしに、夜に入りては、一時間程ぽつ〳〵雨來れり。今日はめづらしく東京より「いづみ」(孫)をつれて、あや子見えたれば、ともに狂うて少しく勞れたり。

一月を旅に住うて且寢たり

○三日　晴　來訪に報ひんとて暖き頃を、或は園池家に、又は橋本家に訪ひつゝありし。此日は昨日見えられし原田男方を音なひしに、風邪の氣味なりし母堂も、熊雄君夫婦も、來合せし知已の齋藤君(興業銀行)夫婦も出で來り、日のくれ〳〵に歸寓。

西の京東の京を雜煮哉

此の平野家といへるは、西京より出せし料理店且旅館なれば、餅は東京の同家より、野菜は京都より供給せるものなり。

○四日　晴　知人の來訪多く東京より來栖健助君見ゆ、原田男より北極あたりにて、昆布にうみつけたるにしんの子を贈られたり。極めて珍なり、もし酒家の之を得たらんには、いかに尊うとかるべき。

酒飲まで今年も生きつ松の内

○五日　晴　此の日東京より花井博士、福田又一、同庫文司諸君見えられ、夜に入り笹原龍雄夫婦と、正午より參られたる原田母堂と、六人食卓

を同うし、睦月の氣分を賑やかに味はひぬ。

冬の梅春の梅咲く宵心

○六日　晴　東京石井家其他より、又此の地原田男方より、くさ〳〵調理して贈られ、田舍人の大聲なる、禮者と寒の入なる物音の冴えたるを門の御慶うづもれふして聞く日哉

俎の音ひゝく宿や寒の入

○七日　晴　東京より石井はつ子、同萬代子兩女史見ゆ。己れ等は橋本家へ夕食に招かれ、夜に入りて歸寓。談笑數時、九時發の汽車にて二女史は歸京。

薺粥人音なふや障子越し

是庭先より知人の訪へる實況なり。

○八日　晴　をかしき馬車に三人うち乘り、曾て此地への靜養を懇切にすゝめられし都築男を訪ふ、案外なる博士の元氣悦ばしく、近頃は緣先に立出で日光浴をなすことありと、全快の遠からざるを祝して。

まのあたり松はみどりに年あらた　四三子

夫れより此程中夫人の見えられし挨拶に、中村是公君許を訪ひしに光則寺地內の高臺にて、此地第一の眺望と、家の結構と、日當りのよきと申分なし。前川太郎兵衛君、花井博士等より珍らしき品々到來此日は何とも云へぬのどかさなりし。

こんな日に鶴孕る歟寒暖き

○九日　曇　十一時半頃よりぽつ〳〵雨來る、夜に入りては寒中らしくみぞる。原田母堂は佐々木政吉博士夫人芳子の君よりとて與兵衛のすし、藤村のもち菓子、此心入れの名品を東京よりわざ〳〵持參せらる。鄉男、都筑男よりの贈物及東京からは酒井伯、安田家、跡見家等より

の好物届く。

有朋自遠方來寒の雨

注連除つて軒淋し雨寒の内

○十日　曇、風、十時過より風く、十一時に佐々木芳子女史、原田母堂見ゆ、されば久方ぶりにうちくつろぎて談笑し、散歩し、佐々木夫人が予を寫生する等中々に賑はし。病人の己れも稍元氣つきたり。晝は日本料理、夜は原田家の用意にて、コック此家へ參り、若夫人も見え、洋食に氣を換ゆ。折から東京より蜷川外四郎君、取引所の新年宴會の一切の書類持參愚見を求む。夜の七時五十二分といふ汽車にて、佐々木夫人を案内して歸京せらる。

客去りて一月は冬となりにけり

○十一日　曇　十二時頃より晴る。東京よりかなめや栗原君、飯田君見ゆ。軒に天井に、我物顔に鼠の振舞はるゝ、春の得ものゝ結果ならまし。

枕邊に慰めぶりよ嫁が君

○十二日　晴　東京よりわざ〳〵笹原龍雄迎へに見ゆ。其他予等の歸京を見送らんと人々たづね參らる。午後三時四十七分發車にて歸京せしに、あや子、いづみ書生も女中も流行感冒にて打ち臥し、看護婦やら臨時雇やらにて辛うじて其の日を送るありさま驚き入りたり。醫師の勸告にて、早速四三子が許へ立退きぬ。

心得ねが予が留主を斯く寒襲う

○予は幸ひに名醫と經驗家に親友あり、現に腎臓炎を病みつゝ日常の事務を執る。三經驗家は早速かけつけ、懇篤なる助言を爲したり。野田大塊、井口省吾、星野錫の三君是なり。歸京後思ひ當る

事多く、其の經驗家の云ふが如く要意しつゝ、日中丈執務する事とせり。三月はじめ迄は夜にかゝる集會へは出席する事、かたく醫師より禁止せられたり。

# 在京日記（大正八年一月）

○十三日　晴天　此日は取引所へ出勤せしに、醫師の勸告にて萬一傳染し感冒にてもかゝる事あらばゆゝしき大事也とて、他へ立退く事となりし、不取敢神樂町一ノ三なる四三子方へしばらく宿泊することに決す。此日より經驗の結果格別食事に注意す。本邸にては看護婦臨時雇女中等ありて大に整頓しあや子、いづみも經過良好なり日當りよく、電車賑か也。

○十四日　晴天　今日はぬくき日影をうけて引籠居たり。午後理髮師と齒科醫との世話になる。服部耕石氏、齋藤峰三郎氏見ゆ、はからず藤田語郎氏來訪に逢ふ、四三子許たつねしなりき、四三子は午後より伊達家へ參り不在なりし。萬代、竹夫見ゆ。

○十五日　曇　九時より取引所へ出勤。諸所の招待一切斷りの返事を出す。夜七時鷹匠町石井夫婦來訪十一時歸らる。

○十六日　晴天　齒科醫へ立寄、取引所へ出勤。不二男、萬代子來訪、書類整理す。

○十七日　晴天　坪谷君、鈴木純太郎君見へ、沼波君見ゆ。萬代子方より大根よく煮たるを竹夫持參す。齒醫者にまゐる。一寸本邸へ立寄りしに、あや子大によろしくいづみよき方也、下女よしよく、幹枝少しあしゝ、書生柴原少しよろし。